慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『藝文研究』総目次：自第I号-至第XXV号
Sub Title	A CLASSIFIED LIST OF CONTENTS OF THE GEIBUN-KENKYU FROM NO.I TO NO.XXV
Author	
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1968
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.26, (1968. 11) ,p.127(13)- 139(1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00260001-0139

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『藝文研究』総目次

（自第Ｉ号―至第 XXV 号）

国語・国文学関係論文

東　澄子	『Feiqe no monogatari』の研究　―問答の研究― その（一）	XX―38
天野みつ江	『細雪』の美	XXIV―1
井口樹生	筋馬考	XX―1
池田利夫	浜松中納言物語に於ける唐土の問題	X―10
	一音節語の名詞の運命	XIII―20
	浜松中納言物語の夢（上） ―その語彙の頻度について―	XVIII―1
	浜松中納言物語の夢（下）	XIX―84
池田弥三郎	物語の成長　―宇津保物語の場合―	II―1
	もの言う枕	XIV, XV―33
	言語のフォークロア　―「奴詞」を中心にして―	XXIII―248
伊藤哲夫	伊勢物語真名本に就いて	VIII―46
大輪靖宏	物語という語の二つの性質について	XX―24
香川景松	小澤蘆庵論	VIII―1
桂　芳久	古代葬制と殯宮挽歌と	XVIII―15
清崎敏郎	誹諧月花の座	II―31
佐佐木一雄	寺院僧侶の国典研究　―主として中世をとりあげて―	IV―17
	明恵上人説話考	VI―1
	野守鏡にみられる宗教性	VII―1
佐藤信彦	万葉集巻五　男子名古日　三首	XIV, XV―19
鈴木　昇	近松世話物の考察（序）	V―21
武井睦雄	「まほし」の性格につきての一考 ―とくに「まくほし」との対比において―	XI―31

竹重信幸	おせんとおさん　—西鶴の場合—	VII—17
塚崎　進	曽我物語伝承論	IV—41
	曽我物語伝承論　その二	V—35
辻　英子	日本霊異記下巻第一話の考察	XIX—99
土田将雄	万葉集における「おもふ」について	XVI—1
	万葉集における霍公鳥の歌	XX—10
寺崎初雄	東海道四谷怪談と南北	XI—11
戸板康二	歌舞伎の「花道」の意味	XIV, XV—58
戸田勝久	戸田茂睡の系族	XI—46
仲井幸二郎	もうひとつの忠臣蔵　—四谷怪談考—	VIII--32
長尾一雄	鉄輪考	XII—19
中林英子	『日本霊異記』に於ける訓釈に就いて	XII—58
西村　亨	源氏物語における「いろごのみ」の概念	VIII—16
	恋からみた恋歌	XVII—1
長谷川　端	『太平記』作者の思想　—「北野参詣人政道雑談集」に現われた政道観について—	IX—1
馬場邦夫	藤原定家の和歌 —価値観の変遷と歌風の変遷をめぐる一考察—	XII—36
東浦佳子	「ささめこと」の諸本の考察	XVI—17
久松潜一	契沖に関する考察	XIV, XV—6
檜谷昭彦	好色五人女　—成立をめぐる試論—	V—1
	因果物語試論	XVII—13
	遊女と地おんな　—近世文学の女性観—	XIX—2
福島行一	日本霊異記下巻第三十八縁に就て	X—1
藤江正通	上田秋成の美意識について	XI—111
	「麁相の美」をめぐって	XIII—89
松原多仁子	「実朝の本歌取の歌」	XXI—1
松本隆信	住吉物語以後　—継子苛め譚の類型に関する一考察—	III—17
森　武之助	実用の文学　—女と花—	III—1
	伝統の周囲　—芭蕉・西鶴—	IV—1
	失われたる古写本の出現	XIV, XV—47

中国語・中国文学関係論文

岡　晴夫	元雑劇做工考	XVII—25
岡本　宏	厳復私論　—翻訳論と文芸観よりみて—	XXII—1
川本邦衛	中国語に於ける品詞分類の標記について	
	“汉語詞类论争”の問題点—	VI—81
	〈把［pə］〉を含む形式について	
	—その統辞論的分析—	IX—15
	詞品論故　—Three Panks 采用の可否について—	XI—67
君島久子	中国の羽衣説話（その分布と系譜）	XXIV—20
佐藤一郎	曽国藩について	VI—65
	曽国藩と俗文学	VII—106
	方苞の散文　—その形成をめぐって—	XII—84
	戴名世・方苞の交遊より見たる桐城派古文の成立	XVI—41
	帰有光の系譜	XX—58
	魯迅雑文中のロマン・ロラン	XXIII—299
林　恵一	列女説話の伝承について	X—37
藤田祐賢	聊斎志異研究序説	
	—特に蒲松齢の執筆態度に就いて—	III—49
	稿本聊斎志異考勘記	VI—16
	論賛と随想の流れ	XIV, XV—78
	聊斎俗曲考	XVIII—29
村松　暎	紅楼夢の小説性	
	—周汝昌の「紅楼夢新證」をめぐって—	IV—73
	紅楼夢論争に対する批判	V—75
	小説家としての李笠翁	XIV, XV—69
	中国文学に現われたる女性像について	XIX—16

英語・英文学関係論文

足立　康	悪の存在について	XIII—48

安部博史	Pearl に於ける言語の研究	XXIV—261
安東伸介	現代英語の特質と諸問題 —Ernst Leisi の方法論—	XII—187
	チョーサーに於ける Nature の問題	XIV, XV—258
	中世英文学に於ける女性像	XIX—36
	A Note on Chaucer's Conception of Nature	XXV—46
池上忠弘	The Green Knight と The Behealing Game —中世ロマネスク文学の構成—	XI—150
	Sir Gawain and The Green Knight における the Temptation について	XIV, XV—285
	Edward II における Tragic Vision	XXII—103
	14世紀地方言文学地図 —ロマンスと主要作品を中心として—	XXV—115
石川実	理想主義者 Brutus —人間性の探索—	XXV—200
石橋裕	イエイツと能・序説 "At the Hawk's Well" と "The Only Jealousy of Emer" に関する考察を中心として	VII—84
岩崎春雄	The Language of Lazamon's *Brut*	XIX—170
	チョーサーとテイル・ライム・ロマンス	XX—189
	The Language of Lazamon's *Brut* (II)	XXI—132
	A Peculiar Feature in the Word-Order of Lazamon's *Brut*	XXV—64
岩崎良三	Dryden と Rymer の思想的交流	XIV, XV—314
	Some Allusions to Petronius in Contemporary English Literature	XXV—31
上田保	象徴主義の実体をもとめて	XIV, XV—322
海野厚志	「自己」と「神」の間 —D.H. ロレンスの「新しい天地」における「他者」相見の意義について	XXV—148
小川繁司	Malory の "The Tale of The Morte Arthur" の言語について —Malory の英語の成長と体系—	IX—130
小田卓爾	OE 詩における Ða 構文 —とくに *Beowulf* の場合—	XXV—254

尾藤　充	Sutton Hoo Ship-Burial と Beowulf について	XIV, XV—246
大橋吉之輔	二十世紀アメリカ小説の現代的性格について	XIV, XV—306
	Sherwood Anderson ノート	XXV—78
海保真夫	漱石のスイフト観について	XXII—83
	政治家としてのスイフト	XXV—218
上村達雄	蕩児と覚者　—Huxley 小論—	XVI—58
	「闇の奥」コンラッド研究（1）	XXV—168
河口真一	Walter Pater と Medetatio Mortis	XIV, XV—331
厨川文夫	Sir Launfal の成立	XIV, XV—343
	Sir ORFEO の構成と意味	XXIII—231
	The Middle English *St. Brendan's Confession and Prayer*	XXV—7
黒川高志	Marlowe の Religious Attitude	XXIV—292
小長谷弥高	The Book of the Duchess に関する一考察	IX—150
	The Monk's Tale に関する一考察	XXV—136
斉藤慶司	The Language of Malory's 'Tale of King Arthur'	XXI—114
鈴木周二	シェクスピア喜劇に於ける扮装	VIII—76
	「こびとたち」の世界 —ハロルド・ピンターの側面—	XVI—80
瀬下良夫	シェリーにおける神の問題	VI—102
武田勝彦	Walter Pater の文体	XVI—166
富永道夫	Cliché 序論（3）　—モームの文体と Cliché—	XIII—129
中村保男	ハムレットの謎	XVIII—44
西脇順三郎	The Virtuosity of T. S. Eliot	XXV—1
原澤正喜	現代英文法の諸傾向——特に口語法について	IV—184
藤井　昇	ヂョン・セルデンのこと —その「茶話」をめぐって—	II—55
三浦孝之助	西脇順三郎論	XVIII—89
安原基輔	Genteel Tradition の崩壊	III—63
	反抗と絶望の黒人作家——Richard Wright	IV—105
柳原伊織	St. Juliana の語順	XXV—241

山田隆一	John Donne: Songs and Sonets に於ける Death について	XXII—92
	Metaphor について［1］	XXV—234
山本晶	古英語散文の語順	XVII—88
	『白鯨』の一解釈	XXV—185
由良君美	内部の論理 —ロマン主義詩学の興起にかんする一考察—	VIII—60
	『「老水夫」のモラルと「千一夜物語」の寓喩』	X—59
	George Steiner and/or Lawrence	XIV, XV—271
	近世イギリスについて一言	XIX—46
和田旦	ジョン・ダンの "The Extasie" —詩の構造に関する一考察—	IX—37

独語・独文学関係論文

荒井秀直	「タンホイザー」に関する若干の基礎的事項について	XII—102
	「さまよえるオランダ人」伝説考	XXV—316
飯田国男	ヘルマン・ヘッセに於ける東洋思想概観	VII—34
池田浩士	ジャン・パウル「生意気ざかり」における「教養小説」形式の破綻	XXI—29
石川光庸	Nibelungenlied における動詞前綴 *ge-*	XXV—415
一ノ瀬恒夫	Erlebnislyrik の先駆者	XIV, XV—216
井手賁夫	若きヘッセの人生態度及至世界観	IV—91
	ベルン時代のヘルマン・ヘッセ	XVII—40
江沢建之助	ブッデンブロオク以前	II—87
尾崎盛景	「アッケルマン」の周辺	XI—87
大橋修子	グレゴリウスにおけるハルトマンの人間観	XX—72
大野俊一	フランスにおけるファウスト	XIV, XV—226
黒岩純一	カフカの「変身」における基礎的問題点	XIX—118
越塚信行	Goethe-Dämon	XVI—179

Faustischer Mensch *Eine Methode zur Faustforschung *
XXV—272
小名木　栄三郎　トーマス・マンのゲーテ観——
「ヴァイマルのロッテ」を中心として　V—93
小　林　栄三郎　リルケにおけるナルシスの変容　XXV—289
小　堀　桂一郎　ピグマリオン
—ルソーとゲーテの一つの出会い—　XXV—334
相　良　守　峯　ゲーテと中世のミンネ　XIV, XV—234
猿　田　　惠　クルト・マイによる『マイスターの修業時代』
解釈の問題点について　X—75
鈴　木　　威　ニーチェの「遊戯」が意味するもの　XX—82
ファウストとヘレナの出会い
—「ファウスト」第二部第三幕の一つの解釈—　XXV—383
高　橋　文　雄　クライストの悲劇性　III—97
田　中　次　郎　西ドイツ文学活動の展望　II—119
塚　越　　敏　リルケ文学解明におけるハイデッガーの誤謬　VI—115
「犬」　XII—1
「犬」(2)　XIII—1
リルケとクレー (Rilke und Klee)　XIV, XV—204
ナルシス　XXIII—265
鐵　野　善　資　初学者のためのカナによるドイツ語発音表記法試案
XXV—367
沼　崎　雅　行　ハンス・ヘニ・ヤーンのメディア劇について　XXIV—43
深　田　　甫　絶対詩の課題の一つ——ヴァレリ・ゲオルゲ・ベン　IX—64
松　本　嘉　久　カフカの作品における時間概念　XXV—401
宮　下　啓　三　表現主義的人間 (I)　XIII—68
表現主義的人間 (II)　XVI—93

仏語・仏文学関係論文

朝　吹　三　吉　ランボーとマラルメ

	—或いはモンドール博士への反論—	XXIII—17
一木瑠美	〈新しい革袋を求めて〉——初期哲学作品における Diderot の表現形式について	XXIV—56
永戸多喜雄	実存主義の歩み——サルトル作「アルトナの幽閉者」をめぐって	XI—101
	アントナン・アルトーにおける「残酷劇」Le théâtre de la cruauté について	XXIII—31
岡本善孝	プルーストの文体における“比較”について	XII—170
大浜甫	アンドレ・マルロォの「孤独」	III—75
	“Mademoiselle de Maupin の Préface”	XIII—146
	ハイネとネルヴァル	XXIII—57
片桐邦郎	アルベェル・カミユの思想と風土について——ジャン・グルニエとの比較による一考察	VI—148
	アルベール・カミユとシモーヌ・ヴェーユ	XXIII—104
片山左京	アルベール・カミュの青春—その歴史に於ける起点とその意味を求めて—	XX—176
加藤勝	パスカルの宗教思想と数学思想	XXI—103
	パスカルにおける宗教的基盤	XXIV—233
鬼頭哲人	ジロドゥの〈ラシーヌ論〉	XXIII—25
桑原雄三	Les Fondements Linguistiques de L'audio-visuel	XXIII—227
小浜俊郎	ジェラール・ド・ネルヴァルに於ける「自然」のイマージュに就いて	IX—83
	O. V. de L. Milosz 中期の詩篇について	XXIII—152
桜木泰行	プルーストにおける詩的現象学	XVII—73
	プルーストと色彩 —「âtre」系の色彩語をめぐって	XXIII—168
佐藤朔	ボードレールとゴヤ	XIV, XV—192
佐藤真	ラシーヌの“La Thébaïde ou Les frères ennemis”について	VII—68
佐分純一	ジュリアン・グリーンの内心の旅路	II—71
	告白的文学における愛の問題—三つの近作をめぐる試論—	XXIII—44

白井浩可	『嘔吐』の成立とその意義	XIV, XV—173
	サルトルにおける「言語」の問題 —Scripta manent—	XXIII—1
調佳智雄	サルトルのドラマツルギー	XVI—122
高畠正明	アルベール・カミュの文学的出発をめぐって —『南』から『幸福な死』まで—	XXIII—129
高山鉄男	バルザックの「ルイ・ランベール」について	VIII—94
	「プチ・ブルジョワ」主題考	XXIII—188
二宮孝顕	Montherlant の《Port-Royal》をめぐって	XIV, XV—183
原宏	対話文学としての「ラモーの甥」 —ディドロ研究序説—	V—107
	「自然の模倣」について —ディドロの美学に関する一考察—	XXIII—115
日高佳	現代フランス語における動詞時称体系についての一考察	XXIV—202
古屋健三	La Naissance de Brulard —Essai sur les conditions de la naissance d'un poète	XXIII—218
	Stendhal et l'affaire Corteys	XXIV—216
松原秀一	Lai de l'Oiselet について	XIV, XV—151
	フランス中世文学の写本と校訂法	XVI—107
	中世仏文学の恋愛観と女性像	XIX—56
	聖アレクシウスの妻	XXIII—83
森昌巳	マルセル・プルースト序説	XIX—157
山田直	『さかしまに』とポール・ヴァレリー	X—87
若林真	アンドレ・ジッド「ユリアンの旅」の成立について	VII—46
	《Paludes》の成立とその意義	XIV, XV—163
	『テレーズ・デスケールー』から『贋金つかい』へ	XXIII—69

美学・美術史関係論文

相内武千雄	Palazzo Pitti —その原作者の問題について—	I—9

	「ブルネレスキの穹窿」	VIII—110
	再び Palazzo Pitti について	XI—1
	Diosuri di Monte Cavallo	XIV, XV—141
安倍富子	ピエール・ボナール——自然への回帰	XXIV—94
岡　直巳	大仏師康助の遺作に就いて	I—76
海津忠雄	浮彫の種類について	VIII—123
河合正朝	海北友松（その伝記と研究）	XXIV—72
渋井　清	江戸板木絵第一回の開花期	I—43
	近世日本文化の構造分析	XIV, XV—96
菅沼貞三	光琳肖像考	I—32
	自性寺の大雅	XIV, XV—110
高野啓一郎	トマス・アクイナスの芸術観	XX—98
高橋　巌	ハインリヒ・フォン・シュタインの美学的思想	XII—121
保坂三郎	播磨国常福寺裏山経塚出土品に縁って	I—57
守屋謙二	ミケルアンヂェロの聖母	I—1
	わが画歴の一節	XIV, XV—89
八代修次	北野天神縁起絵巻の諸特徴	III—89
	美術に現われた女性像	XIX—65
	Pieter Bruegel —素描による教訓画の一解釈—	XXIII—288

諸外国語関係論文

黒田寿郎	ジャーヒリーア詩の象徴性について（上）	
	—詩集「ムアッラカート」を中心として—	XVIII—57
	ジャーヒリーア詩の象徴性について	XIX—129
田中　市郎衛門	ツァワン著　聖成吉思可汗の金言	VIII—143
樋口勝彦	文名に対するローマ文人の憧景	XVIII—96
藤井　昇	Plautus における感嘆及び疑問の ut＋直接法	
	又は接続法の使用について	VII—162
	Martialis の女性（Female Figures in Martial）	XIV, XV—295
	西洋古典（ギリシャ・ローマ）文学の立場から	XIX—26

CATVLLVS の語法 XXV—93

書　評

安倍富子	Art Nouveau: Art and Design at the Turn of the Century, ed. by Peter Selz and Mildred Constantine	XXII—27
大野　洋	The Mozart Companion	XXIV—177
大橋吉之輔	マーカス・クライン著「疎外以後—現代アメリカ小説論」	XX—129
大浜　甫	Tétsuo Takayama: Les Oeuvres romanesques avortées de Balzac	XXIV—185
加藤弘和	The New Radicalism in America, 1889—1963: The Intellectual as a Social Type. By Christopher Lasch	XXII—65
上村達雄	"Three Modern Satirists: Waugh, Orwell and Huxley" by S. J. Greenblatt (1965) について	XXI—62
河合正朝	「等伯画説」—源豊宗考註—	XX—135
高山鉄男	アンドレ・ヴュルムセル「非人間的な人間喜劇」について	XXI—68
中田美喜	Albrecht Schöne: Emblematik und Drama in Zeitalter des Barock	XX—159
	Walter Hinck: Das deutsche Lustspiel des 17. und 18. Tahrhunderts und die italienische Komödie	XXI—75
檜谷昭彦	高野正巳著「近松とその伝統芸能」	XX—119
深田　甫	Erich Auerbach: Mimesis-Dargetellt	XXIV—156
藤田祐賢	加賀栄治著「中国古典解釈史　—魏晋篇—」	XX—122
松原秀一	ポル・ヅムトール「ロマン期の詩の言語と詩法」	XXII—23
松本隆信	横山重編「古浄瑠璃正本集」	XXII—18
八代修次	Erwin Panofsky's, Early Netherlandish Painting —its origins and character	VII—121
若林　真	佐分純一著「ジュリアン・グリーン—魂の遍歴—」	XX—132

資料紹介

渋井　清　曽根崎心中　—竹本義太夫の正本について—　XXIV—111

藤田祐賢　炎凉岸・女開科伝・知不足斎原本批点聊斎志異　VII—117

森　武之助　「東洋之佳人」稿本

「絵入読本外題作者畫工書肆名目集」写本　V—125

その他

創刊の辞……西脇順三郎　I—巻頭

（西脇順三郎記念号記事）

序……佐藤　朔　XIV, XV— 4

西脇順三郎年譜，著作目録　XIV, XV—125

（三浦孝之助，樋口勝彦追悼記事）

哀悼……佐藤　朔　XVIII— 87

三浦孝之助年譜，著作年表　XVIII— 94

樋口勝彦年譜，著作年表　XVIII—105

（佐藤朔還暦記念号記事）

巻頭言……奥野信太郎　XXIII—巻頭

Le Portrait Sentimental……芥川比呂志　XXIII—340

佐藤君の思い出……芦原英了　XXIII—331

先生と私（佐藤朔先生のこと）……梅田晴夫　XXIII—344

佐藤先生の弟子……遠藤周作　XXIII—347

淡路町時代……奥野信太郎　XXIII—315

Enfin, Malherbe vint…　……大久保　洋　XXIII—333

祝辞……田中千禾夫　XXIII—329

佐藤先生と私……二宮孝顕　XXIII—336

S. S 氏……堀田善衛　XXIII—338

朔さんのこと……横　部　得三郎　XXIII—317
佐藤朔略年譜，著作目録　XXIII—351

（後藤末雄追悼記事）
後藤末雄先生を悼む……佐　藤　　朔　XXV—457
後藤末雄略年譜，著作年表　XXV—459

『藝文研究』刊行年月

I　（美術学特集）……1951—12
II……1952— 2
III……1954— 1
VI……1955— 2
V……1955—11
VI……1956—12
VII……1957—12
VIII　（慶応義塾創立百年記念）……1958—10
IX……1959—12
X……1960— 6
XI……1961— 1
XII……1961— 7
XIII……1961—12
XIV, XV　合併号（西脇順三郎先生記念論文集）……1963— 1
XVI……1963—10
XVII……1964— 2
XVIII……1964— 9
XIX　（特集「文学・芸術に現われた女性像」）……1965— 1
XX……1965—11
XXI……1966— 4
XXII……1966—11
XXIII　（佐藤朔先生還暦記念論文集）……1967— 2
XXIV……1967—12
XXV　（英語英文学・独語独文学特集）……1968— 3
同号分冊……1968— 4